

5月29日（月）その23 詠み人知らず－吉田正－

朝ドラ「ひよっこ」では社内合唱サークルのような設定で、みんなで歌を歌うシーンがよくある。ちょっと前にロシア民謡の「トロイカ」を歌っていた。「カチューシャ」、「灯火（ともしび）」など、シベリア抑留から解放された帰国者によって日本に多く持ち込まれたと、ナレーションの増田明美さんが話していました。ほかにも「一週間」、「悲しき天使」、「ポーリュシカ・ポーレ」、そして「100万本のバラ」もロシア民謡である。

私はシベリア抑留と聞いて、吉田正さんを思い出した。皆さんは、吉田正さんを知っていますか？皆さんも、心にしみる歌や自分の人生を励まされてきた歌が1つや2つはあるでしょう？その歌を歌っている人が誰なのかはわかるとは思いますが、その歌の作詞と作曲は誰がやったのかわかりますか？

吉田正（よしただし）さんは、戦後の日本歌謡の基礎を作った方で、平成10年・1998年に亡くなりましたが、国民栄誉賞も受賞した作曲家です。

「異国の丘」、「有楽町で逢いましょう」、「東京ナイト・クラブ」、「潮来笠」、「再会」、「いつでも夢を」、「美しい十代」、「傷だらけの人生」と数え上げればきりがありません。生涯に作曲した曲は2,400曲を超えるそうです。

彼は若い頃シベリアで終戦を迎え、ソビエトの捕虜となります。いわゆる「シベリア抑留」です。57万人の日本人が捕虜として、シベリアで長期にわたる強制労働をさせられました。厳しい寒さの中、満足な食事も与えられず、少なくとも5万5,000人以上の日本人が亡くなったと言われています。

ちなみにシベリア抑留の過酷な状況は、山崎豊子の「不毛地帯」にも詳しく描写されています。

「このまま死ぬのか！」という先の見えない収容所生活で、吉田さんは、「帰還の日まで」という歌を作り、瀕死の捕虜達を励まし続けました。「この歌に救われて、生きながらえて帰国することができた」と、何名もの方が証言しています。吉田さんは3年間の強制労働の後、九死に一生を得て帰国することができました。彼は帰国後、作曲家の道を歩み始めます。明るく希望に満ちた吉田正さんの歌は、戦後の混乱期から高度経済成長期へと向かう日本を励まし続けました。特に昭和37年（1962年）橋幸夫と吉永小百合が歌った「いつでも夢を」は、日本中の人の心に灯りを灯し、日本レコード大賞に輝きました。高度経済成長期を象徴する楽曲として長い間日本国民に愛され、スタンダードナンバーになっています。

吉田さんは生前こんなことを語っていました。「戦後、あの『異国の丘』を、私が作ったと知らないでみんなが歌っていました。歌はいつか詠み人知らずになっていきます。そうして本当にいい歌は、歌い継がれて永遠の命を持つのではないのでしょうか。私の作った曲の中からひとつでも『詠み人知らず』になり、そのことを楽しみにこれからも作曲を続けたいと思います」。

吉田正さんは、日本中のいろいろな学校の校歌の作曲を意欲的に続けてきたそうです。依頼されたら、断らなかつたそうです。作曲したのが誰であれ、校歌は子供たちを育てていきます。シベリア抑留の過酷な体験を経て吉田正さんが歌に託した生きる希望は、詠み人知らずの歌となり、未来を照らし続けています。

教育実践でも、誰かが熱心に研究したことが「詠み人知らず」になって、全国で広く実践されていることが、たくさんあるのでしょうかね。

6月1日(木) その24 一隅上げれば三隅が上がる

29日(月)に、島尻教育研究所初代所長の宮城恒彦さんの特別講話がありました。私は宮城恒彦さんを大変尊敬しており、これまでに4～5回、慰霊の日の近辺に、自分の職場の職員に宮城さんのことを語ってきました。退職後に自身の戦争体験や座間味の人たちの体験(聞き取り)を毎年一冊の本にまとめ、26～27年続けてきたこと。私も4～5冊いただき、今も持っています。教育事務所や教育研究所の皆さんに直筆の手紙や色紙等ですっと激励をしていること。いずれも自費で30年近くも継続してなさっていること。また高校教科書から「日本軍が集団自決を強制した」という記述が削除されたときにも、沖縄戦の実相を伝えようと平和学習ガイドブックを作成したこと。……などなど頭が下がる思いがします。

今回の演題は「一隅上げれば」で、自身が教員時代に実践なさったことや自身の教育哲学を中心にお話ししてくださいました。「教師の10のメニュー」では、信念の塊のようなお話を聞くことができました。研究生のために、誠にありがとうございました。

一隅上げれば三隅が上がる。立方体の一つの隅を引き上げると、それに連動して、他の隅も自然に動き出し、しまいにはそのもの全体が上がる。人の欠点は見つけやすいが、長所は見つけにくいものです。子ども達の長所や美点を見つけ出し、それを自他に認めさせ生かすことは教師の重要な務めである。教育の究極の目的はそこにあるかも知れない。などなど……。

自分のよさを伸ばし、素晴らしい人生にするために勉強をするのであると、私も中学生にずっと言い続けてきた。生徒本人も自分のよさは、わからない。その「よさ」を賞賛することにより、最初は小さなものかも知れないが、本人もその気になり努力を重ね、段々と大きなものになっていくのである。

宮城恒彦さんからお土産もいただきましたね。皆さんはもう読みましたか。有島武郎の「一房の葡萄」と鈴木秀子さんの解説。心の葛藤がありながらも盗みをしてしまった少年と対応した担任の先生の話。悪いことをした少年に先生は頭ごなしに叱ることはしないで、「盗んだのは本当ですか。」、「絵の具はもう返しましたか。」、「あなたは自分のしたことをいやなことだと思っていますか。」、「明日はどんなことがあっても学校に来なければいけませんよ。あなたの顔を見なければ私は悲しくなりますよ。きっとですよ。」と話し、一房の葡萄を少年の鞆の中に入れます。……研究論文の所内検討会等で多忙だったので、まだ読んでない人がいるかも知れませんね。これくらいにしておきましょう。教育の原点を見たような大変心にしみるお話でした。

いただいたエッセーも読みました。「磯の五月雨」は少年の日の思い出を綴ったものでした。私もアマン(ヤドカリ)を餌によく釣りをしました。でもあんな格調高い文学的な表現で綴ることはできません。

「三つの長崎」は、永井隆の「長崎の鐘」がメインでした。少年のときに沖縄戦を体験し座間味村の集団自決を目の当たりにした方の心から戦争を憎む気持ちがひしひしと伝わってきました。私は「長崎の鐘」の永井博士のことを何度か道德の授業で取り上げましたが、戦争を体験していない私には、とてもこのような「深い語り」はできません。

名刺の裏に「ふるさとの 山河に散りし御霊らの 語れぬ無念(おもい) 永遠(とわ)に忘れじ」とありました。

6月2日（金）その25 骨やミトコンドリアは語る

5月20日の新聞の一面トップは、石垣市の白保で国内初となる旧石器時代の墓地が発見されたというビッグニュースでした。約2万7千年前のもので、少なくとも19体分の旧石器時代の人骨が発見され、世界でも最大規模であるとのことでした。

琉球新報の電子版を検索してみると、沖縄では1万6千年以上前の旧石器時代の人骨が10カ所の遺跡で見ついているようだ。那覇の山下洞で3万2千年前の人骨の一部、八重瀬町の港川人は2万2千年前の人骨で完全標本（体の全ての骨がそろっている）、南城市のサキタリ洞では2万3千年前の人骨や世界最古の釣り針などが見ついている。また宮古島市のピンザアブ洞でも2万6千年前の人骨が見ついています。

全国では旧石器時代の遺跡は1万カ所以上あるらしいが、人骨は静岡県浜松市の一カ所だけとのこと。火山の多い土地では、酸性土壌のため人骨は溶けてなくなってしまうらしい。その点沖縄は、隆起珊瑚礁の琉球石灰岩で弱アルカリ性のため骨が溶けにくいとのことらしい。しかし不思議なことに県外の遺跡は全てから打製石器が見ついているのに、沖縄では全く見つかっていないとのことである。

2～3万年前に、琉球列島にはすでに人間が住み着いていたのである。その頃にはすでに、沖縄は島になっている。ではどこから来たのだろうか。

2年ほど前に「日本人のルーツに挑む」と題して、国立科学博物館が台湾から与那国まで、草で編んだ船を使って3万年前の方法で実験航海をしたのを覚えているだろうか。残念ながら黒潮の強い流れに流されて、実験は成功しなかったが、再び挑戦するようである。今回は竹で編んだ筏を使って再チャレンジするようである。

「日本人になった祖先たち」という本を読んだことがある。著者は、篠田謙一（しのだ・けんいち）さんという国立科学博物館人類史研究グループ長で、分子人類学の第一人者だそうです。現在生きている全ての人類の祖先は、アフリカで15万年前に誕生したことが、ミトコンドリアDNAの研究からわかるそうです。詳しい根拠は誌面の都合で省略しますが、人類は7万年ほど前に、アフリカを出て全世界に散らばっていきます。ミトコンドリアDNAの研究で日本への人間の移動を見てみると、インド北部からインドネシアに入ってきた人々が、フィリピンなどを経て沖縄へ、そして日本全国に広がったと考えられるそうです。また、シベリアからアメリカに向かう人々の一部が南下して樺太などを經由して北海道に入ってきたこともわかるそうです。さらに弥生時代に朝鮮半島から人々が入ってきて、北部九州や中国、近畿・・・と広がっていったこともわかるそうです。

12世紀頃、南九州から農業を携えて沖縄に来てグスク時代を築いた人々が、琉球王国を作ります。しかし新しく入ってきた人々は、従来からいる人々を駆逐することはしませんでした。ミトコンドリアDNAの研究から、在来の人たちの数も増加していったと、わかるそうです。

ひええ～、人間の細胞の中にあるミクロなミトコンドリアDNAが、人類の歴史を雄弁に語っていることに驚愕・感動しています。「私のミトコンドリアよ！ミトコンドリア！私の祖先は、どこから来たのか教えておくれ！」